

人間嫌い

人間きらい

<登場人物>

アルセスト

フィリスト

セリエーヌ

オロント

齊藤

第0場ジェノサイドラブソティ第7楽章「渦の中の花たち」

男1「反吐、男達の反吐で充満した。汚れた町、渋谷」

男2「今宵、この汚れた町に一人の少女が降りった」

男3「その少女は、秋田出身。これがr少女は、この汚れた町で、どのように汚れていくのか」

男1「その少女は秋田名物きりたんぽの様に、白く透き通った肌をしていた」

男2「その少女は山形名物さくらんぼのように、赤く艶やかな唇をしていた」

男3「その少女は福島名物ママドールの様に、甘い淫乱な香りをしていた」

女「ここが東京か～。うわぁ、109！ホントにあるんだ。」

女「ここから、私の生活。ココから！」

女「ドキドキわくわくともだちのみかい。」

女「ばいと、せんぱい、やくそく、でーと」

女「ごはん、おいしい、たのしい、でーと」

女「ゆうえんち、こくはく、かれし、でーと」

男1「ねえねえ。一度でいいからさ。AVみたいなことをやってみたいんだけど」

女「え？」

嵐。

女「しにたい、しにたい、しにたい、しにたい」

女、注射をうつ

女「うぐうぐうううううううあぐ」

女「あ、妖精さんだ」

第一場飲み会のあと

部室棟の屋上

アル「つかれた」

フィ「おつかれ」

アル「はぁあ、なんでつまらない芝居見るとこんなにテンション下がるんだろ」

フィ「まあね。」

アル「いや、クソでしょ。」

フィ「うん。いや、でも、そうかもしれないけど。」

アル「なに。」

フィ「それなりに長い付き合いだから言うけどさ。」

アル「なんだよ」

フィ「そのさ・・・暗転中に、「え、なんでここで暗転」って・・・言わなくてよくない？」

アル「なんで」

フィ「なんでって。おまえ、あのときの空気、完全に凍り付いてたよ」

アル「知らないよ」

フィ「いやいや」

アル「みんな思ってたことを代表していただけなんだから」

フィ「いや。好きなひともいたかもしれないでしょ」

アル「いないよ。そんなの」

フィ「いたよ、となりの席のひと泣いてたもん」

アル「目にゴミが入ったとかじゃないよ」

フィ「お前さ。そういう風に自分価値観を押し通すのはよくないって」

アル「自分の価値観を信じなくて、なにを信じるんだよ」

フィ「だから、信じるのは、おおいに結構なんだけどね。人の価値観を否定することはないでしょ。」

アル「別に否定しているわけじゃないよ」

フィ「否定してることになっちゃうから」

アル「僕は僕の感想を言ったまでだよ」

フィ「でもそれが結果として人を不快にすることだってあるでしょ」

アル「なんで不快になるんだよ。」

フィ「だからさ。逆の立場で考えてみろよ」

アル「そんなのわかんないよ」

フィ「じゃあ。なんだろう。たとえば、お前の好きな女優は誰だよ。劇団とかでもいいから」

アル「・・・」

フィ「・・・」

アル「取り消せよ！」

フィ「な。そうなるだろ」

アル「それはそうだろ。」

フィ「だから、そういうときは、「俺は皆いいと思ってるけど、個人的にはこう思うよ」って言う言

葉を頭につけたりするんだよ」

アル「なんだそれ」

フィ「そうやって、オブラートに包むことも必要だって言うてるの」

アル「なんでそんな気を使わなきゃいけないんだよ」

フィ「だから、人とうまくやっていくための潤滑油だよ」

アル「馴れ合いだろ」

フィ「ちがう、そうじゃなくてね、これからさ。そういうことはいろんな場面で出ていくとおもう

んだよ。そのときにさ、思ったことをそうやってすぐに口に出してたら。社会の中でつまはじきにさ

れるのが目に見えてるからさー」

アル「違うんだよ。」

フィ「なんだよ」

アル「俺は本当の意味でチームになりたいんだよ。嫌いだったら嫌いでって言ってほしいんだよ。

そし

たらぶつかればいいだろ。ぶつかってぶつかって、こう、言葉では言い表せない。よくわからない塊

になるんだよ。そういうもんだろ」

フィ「まあそれ理想かもしれないけど、最終的にわかりあえないことだってあるでしょ。そのときは

どうするの」

アル「そのときはそのときでしょ。」

フィ「どうするの」

アル「そんなやつと付き合うことないって言うてるんだよ」

フィ「だから、それ。そういうのが根本的にあるからダメなんだよ」

アル「は。おい。ダメってなんだよ。ダメって」

フィ「いや、だから」

アル「自分こそそうやって人のことを否定して言っていることとやっていることが違うじゃないか」

フィ「だから、違うよ。」

アル「何が違うんだよ」

フィ「ああ。だから・・・もう、いいよ。別にお前がどうなったって。知ったことじゃないから。」

アル「なんでそういうこというんだよ」

フィ「ね。ほら。そういう風にどうだっていいって思ったら終わりでしょ。」

アル「たしかに」

フィ「だから俺は友達だと思ってるから言うてるんだよ。」

アル「ああそうかなるほど。つまり、そうか。君は真の友人ということなわけだもんな。うん。」

アルセスト、フィラントに握手を求める。

フィ「お、おう。」

アル「そうだな。僕はそういうところがある。僕は人を否定するところがある、よくない、だから、

気をつけるよ。気をつける。こんどから、なるべく。うん」

フィ「うん。まあ。すぐに変わるのは難しいと思うけど」

アル「で、他には？」

フィ「ん」

アル「他にないか。僕の悪いところ。聞いておきたいんだ。一応。君の言うことなら、信用できると

思う」

フィ「あ、そう。・・・そうね。基本的に言葉数が少なすぎるだよね」

アル「だまれ、おしゃべりクソ野郎。あ、、、ごめん。そうか。これか。」

フィ「うん。そうだね。お前が余計だと思う言葉も実は大切だったりするからね。そういうところを

省略することで、人を傷つけちゃうことって多々あるからね」

アル「あはあ。そうか、全然気がつかなかったや。ありがと・・・」

フィ「お、いい傾向じゃないか」

アル「なるほど・・・」

フィ「うん。そうだよ」

アル「じゃあさ。僕からもひとつだけ言っていいかな」

フィ「おお。いいよ」

アル「君はあの芝居面白いと思ったの？」

フィ「いや、全然」

アル「だよね。うん。そうだよね。じゃあ、なんで面白いって言ったんだよ。」

フィ「だから、それは一応、調子を合わせておかないと」

アル「なんでそういうことができるかなあ」

フィ「だってみんなのうまくやってきたいもん」

アル「ウソつきじゃないか」

フィ「本音だけいってちゃ生きていけないよ」

アル「裏切りもの」

フィ「知らないよ」

アル「僕だけ一人にしやがって。同じこと思ってるのに。うそつき、裏切りもの」

フィ「あのね。君と同じ様に振舞ってたら。破滅だから。」

アル「望むところさ」

フィ「勝手にやってくれよ」

アル「おい。友達だろ」

フィ「だから、そうならないためにどうしようかって話だろ」

アル「知ってるよ。だから、僕は初めからその話をしてるんだよ。」

《オロント登場》

オロ「あ、どうも」

アル「あ、え？」

オロ「あの、すみません。いきなり、あの、僕、アルセストさんにその憧れていて、その、自分、趣

味で歌をやっていて。作った曲を聴いてもらえないかと思ひまして。」

アル「あ、いいよ。歌ってみて」

オロ「はい、じゃあ。さっそく。ワン、ツースリー……。」

オロント、歌う。

フィ「すごい声いいね」

オロ「あ、ありがとうございます」

アル「で、聞いたけど。僕はどうすればいいの」

オロ「あ、えっと。その、あ感想をいただけるとありがたいと思います」

アル「そっか。うん。まあ……何もないよね」

オロ「あ、あは」

アル「え、これは、僕のことを言ってるの？」

オロ「あ、はい。そのアルセスト先輩のことを見ていたら勝手に沸き起こってきた感情をすぐさま詩

に書き起こして……」

アル「それ失礼だから。」

オロ「え？」

アル「それ悪口だから」

オロ「いや、その、僕はそのすごく尊敬してて」

アル「君はさ。詩人なんだよね。詩人ってのは、人を喜ばせるために詩を書くんじゃないの？え、お

れなんか間違っただこと言ってる？」

オロ「いや、あの、トリッキーにしてみたっていうか」

アル「トリッキーとかいいから。ね」

オロ「すみません」

アル「あとさ。あれ……のパクリだよね。わからないとおもった？」

オロ「いや、あ、はい。すみません」

アル「いや、別にあやまってほしいとかじゃないからさ」

オロ「いや、でも、すみません」

アル「いやほんと、まずさ。腹式もできてないしさ。」

オロ「ボイトレとかも言ってるんですけど」

アル「え、え？なに？」

オロ「だからボイトレとかも」

アル「意味ないね。それ。ぜんぜんできてないもん。うん。」

オロ「あ、」

アル「腹筋やったほうがいいんじゃない？僕なんか毎日腹筋300回やってるよ」

オロ「あ、はい。じゃあ、やってみます」

アル「いや、でも、どうだろな。才能ないと思うからやめたほうがいいかもしれないね。」

フィ「おい！」

オロ「あ、そうですか」

アル「あ、もういい？俺、今、話してるから」

オロ「あ、ほんと、すいませんでした」

《オロント去る》

フィ「お前さ、さっきまでの話聞いてた？」

アル「聞いてたよ。」

フィ「じゃ、なんであんなこといったんだよ」

アル「僕は、ただ彼のために思ってさ。」

フィ「何が彼のために思ってだよ。」

アル「僕は思ったことを言ったまでだよ」

フィ「だからそれ」

アル「うるさいな。もう、うっちゃっといてくれ」

フィ「はいはい」

《ワークショップは出会いの場》

齊藤「はい。えー。今日は、えー、劇団機関車トーマスのワークショップにお集まりいただきありがとうございます

とうございます。主宰の齊藤です。よろしくおねがします。」

アル「よろしくおねがいします」

セリ「よろしくおねがいします」

齊藤「じゃ。まず。簡単に自己紹介の方からやっていきたいと思います。えー。名前と劇団名と、あ

とあの、過去にもし機関車トーマスの芝居を見たことがある方は何を見たのかということと、あと

最近あったすごく面白かった出来事を言ってもらいたいな、と思います。はい、じゃえっと、まずは

こちらの方から」

アル「はい。えっと。劇団虹色パレットという劇団で役者をやらせてもらっています。アルセスト

と申します。あっくんって呼んでもらえたらと思います。」



斉藤「あっくん」

アル「よろしくお願ひします。えっと。機関車トーマスさんの芝居は第3回公演から全部見てるんで

すけど、個人的に一番好きなのは、えっとあの、ちょっとタイトルを度忘れしちゃったんですけど、

あの・・・一文無しになった女が、すごい太っている昔の同級生に体を売りにいくっていう」

斉藤「『コトバシンタイソシテイクツカノオト』ね」

アル「それっす。はい。それが一番好きです」

斉藤「うん。あれはすごくいいよね」

アル「はい！なんかすこしコンテンポラリーっぽいところがすごい新しいっていうか、はい」

斉藤「ああコンテンポラリー。そうね。そういうところあるね。うん」

アル「あと。最近あったすごい面白かった出来事は・・・この間の日曜日に公園を散歩してたら、

犬がボンって当たってきて。で、当たってきた犬がすごい混乱していたっていう。のが、はは。は

い。面白かったです。機関車とオーマスは本当に一番好きな劇団で

斉藤「はい。じゃ、あっくん。よろしくお願ひします」

アル「よろしくおねがひします」

斉藤「じゃ、次は、はい。よろしくお願ひします」

セリ「はい。えっと。セリエーヌと申します。いま、フリーで役者やっています。えっと。。セっち

ちゃんって呼んでください。よろしくお願ひします。

斉藤「セっちゃん」

セリ「機関車トーマスさんはこの間やっていた「わが息子」がはじめてで。

斉藤「僕と僕のおちんちんについての二人芝居ね」

セリ「はい。すごい面白かったのでこのワークショップにきました」

斉藤「ありがとうございます」

セリ「えっと。最近あったすごい面白かった出来事は・・・ありません。すいません」

斉藤「いいね。正解。それも正解だよ。」

セリ「あ、ありがとうございます。」

斉藤「はい。セっちゃんです。よろしくお願ひします」

アル「よろしくおねがひします」

斉藤「では、ですね。まあ少しづつはじめていきたいと思いますけれども。まああの、うちの劇団の

芝居を見てもらっているということで、なんとなく、わかるかなって思うんですけども。一番その

大事にしているのが、リズムやテンポってって思われがちなんだけども、作り手として一番気に

して  
いることは、そのリズムやテンポっていう縛りの中での、ぶわってという感情の交換、せめぎ合い、社  
会性みたいなのを見せていきたいと思っているわけです」  
アル「なるほど」  
斉藤「ということで、まず「息の交換」というものをやっていきたいと思います。やりかたは簡単  
で  
す、相手に届くように「ふー」とできるだけ長く息を吐いてみてください。」  
アル「ふー」  
斉藤「で、相手の人はそれを感じて、静かに「ふー」と息を吐き返してみてください」  
セリ「ふー」  
斉藤「そう。じゃ。それを繰り返してみてください。」  
アル「ふー」  
斉藤「あっくん、届いてないよ。届けて」  
セリ「ふー」  
斉藤「いいよ」  
アル「ふー」  
斉藤「あっくんちゃんと受け取って」  
セリ「ふー」  
斉藤「いいよ。すごくいい」  
アル「ふー」  
斉藤「あっくんちゃんと受け取ってって」  
セリ「ふー」  
斉藤「いいよ。すごくいいよ」  
アル「ふー」  
斉藤「あっくん届けて」  
セリ「ふー」  
斉藤「そうすると、ミゾオチのあたりがぼかぼかしてくると思います」  
アル「あ」  
斉藤「それが「感情」です」  
セリ「すごい」  
斉藤「つづけてください。すぐに壊れてしまいますよ」  
アル「ふー」  
セリ「ふー」  
斉藤「はい、じゃあ。そのままお互いを共有して自由に動いてみてください」  
セリ「ふー」  
アル「ふー」

セリ「ふー」

アル「ふー」

セリ「ふー」

アル「なんだろう、この感覚。はじめてだ」

セリ「すごく暖かい、これはいったいなんなんだろう」

アル「打ち合わせもしていないのに」

セリ「相手のことがわかる」

アル「私があなただ」

セリ「貴方が私？」

アル「これに名前をつけるなら、それは」

二人「愛」

斉藤「(手をたたく) はい、おつかれさまです。どうでした？」

アル「・・・あ。ここはどこですか」

斉藤「スタジオですよ」

アル「え？でも。いま」

斉藤「どこにいたんですか」

アル「いま、僕は完全にここではないどこか。どこだろう。そこは」

セリ「宇宙？」

アル「そう宇宙にいたんです。僕ら二人」

斉藤「そうなんですよね。それが、感情っていうものなんですね。」

アル「なるほど」

斉藤「いま、二人の仲にどんな感情が交換されたのかな。」

一瞬見つめ合う二人

斉藤「はい。じゃあちょっと5分くらい休憩しててください」

気まずい時間

アル「あ、おつかれさまです」

セリ「あ、おつかれさまです」

アル「あの・・・この間、見ました」

セリ「え、あ。ウズハナですか？」

アル「ん？あ、え、あー。ん？」

セリ「「渦の中の花たち」」

アル「あー、あ、はい。「渦の中の花たち」。それ、見ました」

セリ「ありがとうございます」

アル「あ、いや。こちらこそ。」

セリ「... どうでした？」

アル「えっと。その。なんていうんだろう。つまならかったです。いろんな意味で」

セリ「おー。」

アル「なんですか」

セリ「正直なんですね」

アル「いや。でも。その、その中でも、セリアーヌさん、いや、せっちゃんさんだけは、輝いていた

って思ったんです。本当に」

セリ「いいですよ。そんな気をつかわなくても」

アル「気なんて使ってません。気を使うやつなんて大嫌いです」

セリ「面白いですね」

アル「いえ。そんな。僕はただ、・・・ウソが嫌いなだけです。」

セリ「そうなんですね」

アル「はい」

セリ「私もウソは嫌いです」

アル「そうだと思いました。」

セリ「そうですか？」

アル「なんとなく」

セリ「そっか。」

アル「いや、でもいいと思います。すごく」

セリ「あ。・・・ありがとうございます」

アル「好きな劇団はどこですか？」

セリ「私は、キャラメルボックスが好きです」

アル「キャラメルボックスですか？」

セリ「嫌いですか？」

アル「はい、嫌いです。だってなんか恥ずかしいですか」

セリ「じゃあ、どこの劇団が好きですか？」

アル「僕は、寺山修二の天井桟敷が好きです」

セリ「え？寺山修二ですか？」

アル「嫌いですか？」

セリ「だってわかりづらいじゃないですか」

アル「じゃあ、好きな動物はなんですか？」

セリ「私はゴリラが好きです。あっくんは？」

アル「僕はシロナガスクジラが好きです」

セリ「好きな季節はなんですか？」

アル「僕は夏が好きです。」

セリ「夏っばい」

アル「せっちゃんさんは？」

せり「私は冬が好きです。」

アル「僕は冬が嫌いです」

セリ「なんで？」

アル「だって、寒いしすべるとあぶないじゃないですか」

セリ「夏は暑くてきらいです。」

アル「じゃあ。好きな天気はなんですか？」

セリ「私は曇りが好きです。あっくんは？」

アル「僕は晴れが好きです」

セリ「じゃあ、逆に嫌いなものはなんですか？」

アル「嫌いなもの？・・・うーん。人間がきらいかな。」

アル「・・・あ、でも。君のことは好きです。」

セリ「私も好きです」

《アルセスト、演劇やめるってよ》

フィ「ていったの？」

アル「うん。」

フィ「で？」

アル「付き合うことになった」

フィ「え！？すごいな。セリエーヌ。よくそんな告白でおっけーしたな」

アル「まあそういうことなんだ」

フィ「へえでもよかったじゃん。」

アル「うん。でね。いろいろ、考えたんだけど。演劇やめようと思って。」

フィ「え、まて、なに言ってるの」

アル「うん。だからね。おれ自身の中の優先順位が変わってしまったっていうか。その、今までは俺

はもう、演劇だったわけじゃない。」

フィ「いやよくわかららないんだけど」

アル「でも今はそれが完全にせっちゃんになっちゃったんだよね」

フィ「お前、本気でいってるの？」

アル「俺はいつでも本気だよ。」

フィ「あのさ。もうちょっと考えろよ。」

アル「いや、考えたよ。考えて考えて、この結論なんだよ」

フィ「だからなんでお前はそうやっていつも極端なわけ」

アル「誠実でありたいんだよ。」

フィ「どこが誠実なんだよ。一緒にやってこうっていったじゃんかよ」

アル「だからそれは申し訳ないって思ってるよ。」

フィ「申し訳ないってさ。なんでそうやって決める前に相談してくれないんだよ」アル「相談したと

ころで、結局決めるのは自分だしさ」

フィ「そうだけどね。そうかもしれないけど。」

アル「だから、ごめん」

フィ「ちょっとまって。え、ほんとに終わりなの」

アル「でも。君とは友達でいたいと思っているから」

フィ「それはまあそういつてくれるのはありがたいけど。そういうこと言われたら。それはわからな

いよ」

アル「まあそれならそれでしかたがないや」

フィ「それでいいのかよ」

アル「いやだよ。でもそれは君が決めることだろ」

フィ「そうだな」

アル「俺は一生友達だと思っているから」

フィ「うん。まあ・・・幸せにな」

アル「もちろん」

フィ「またな」

アル「またな」

《束縛男子》

セリ「ただいま、あっくん」

アル「せっちゃん。おかえり。おつかれさまー」

セリ「なに、なんかいいことあったの？」

アル「まあね。」

セリ「どんなこと？」

アル「まあ二人にとっていいことかな」

セリ「なに？」

アル「芝居やめてきた」

セリ「え、なんで」

アル「なんでって。もっと二人でいたいから」

セリ「え、なんでそういうことするの？」

アル「え？・・・だから、俺の中で、今、なによりも、せっちゃんと一緒にいたいんだよ」

セリ「でも、だって。やめて何するの」

アル「だからせっちゃんと一緒にいる」

セリ「その気持ちは嬉しいんだけどさ。」

アル「うん」

セリ「え、だって。」

アル「なに？」

セリ「芝居、好きだったんでしょ？」

アル「好きだったよ。好きだったけどさ。それはもう過去の話なんだよ。」

セリ「そうなんだ」

アル「え、せっちゃんは、芝居やってない俺じゃだめ」

セリ「・・・いや、そうじゃないけど」

アル「ほんとに？芝居やってなくても。俺のこと好き？」

セリ「それはうん関係ないと思うけど」

アル「よかった。それだけが心配だったからさ。時間もできたしさ。こんど映画とか見に行こうよ。」

セリ「ねえ。あっくん」

アル「なに？」

セリ「もっと自分を大切にしたいほうがいいと思うよ」

アル「大切にしてるよ。」

セリ「どこらへんが？」

アル「だから、せっちゃんと一緒にいることが僕にとっての一番の幸せだから」

セリ「私、いなくなっちゃうかもしれないよ。」

ル「いなくなっちゃうの？」

セリ「たとえばの話」

アル「なんだ、びっくりしたな」

セリ「でも、いなくなっちゃうかもしれないよ？」

アル「いなくなっちゃうの？」

セリ「たとえばの話」

アル「なんだ、びっくりしたな」

セリ「でも、いなくなっちゃうかもしれないよ？」

アル「いなくなっちゃうの？」

セリ「うん。いなくなっちゃう」

アル「え、やだよ。そしたら、俺、どうしたらいいかわからないよ。」

セリ「それでも、あっくんはひとりでどうにかやっていかなきゃいけないでしょ

アル「やだよ。やだよ。そんなこと想像もしたくないよ」

セリ「想像するの、今のことだけ考えてないで」

アル「俺はどうしたらいいの？」

セリ「自分で考える」

アル「自分で考える」

#### 《公園》

フィ「おう、久しぶり」

アル「やあ久しぶり」

フィ「おうアルセストひさしぶりにしてるのこんなところで」

アル「考え事」

フィ「あっそう。」

アル「うん。」

フィ「ちゃんと就職活動してる？」

アル「してない。」

フィ「してないじゃないよ。いまの時代、新卒だって厳しい世の中なんだから」

アル「だから今、そのことについて考えているんだよ」

フィ「あっそう。そっか。で、なんか結論でたの」

アル「いや、まだ」

フィ「とりあえず合同説明会とかいってみれば」

アル「いったよ、一応」



フィ「いったの？お前が？スーツきて？」

アル「いや、スーツはきてないけど」

フィ「スーツきなかったの？あ、でもいったんだ。すごいね。」

アル「そうでしょ？」

フィ「で？」

アル「で、なんにも、合いそうなのが見当たらなかったの」

フィ「あ、そう。」

アル「だからね、きっと。俺を必要としているのは、まだ見ぬ仕事ってということなんじゃないかなっ

ていうところまでたどり着いたとこ」

フィ「なに、まだ見ぬ仕事って。ベンチャー企業とか？」

アル「わからない。けど、そうかもしれない。」

フィ「起業するってこと？」

アル「わかんなに。でも、特に起業したいっていう意欲はないんだよね」

フィ「あっそう。じゃあ、なにしたいの」

アル「セリエーヌと一緒にいたい」

フィ「ま、そのためには早く仕事みつけないとな」

アル「そうなのか？そういうものなのか？」

フィ「そういうものでしょ。女っていうのは意外に現実主義だよ。」

アル「なんか幻滅だな。愛っていうのは、そういうものとは関係なく存在するものなんじゃないのか

な」

フィ「理想を言えばそうかもしれないけどね。でも現実はそうだよ」

アル「そっかあだよ。じゃあやっぱりどこでもいいから就職して、結婚して、新婚旅行でサイパン

にあって、20年ローンでマイホーム買って、二人の間に子供ができて、私立の幼稚園に通わして、

老後は海外で幸せな生活を送るんだって・・・違うよ！「

フィ「何が？いいじゃない」

アル「違うよ、僕は今、純粋に何をやりたいかを考えているんだ。今は、そういう愛とか、そういう

のを抜きに考えなきゃいけないと思うんだ。純粋に。」

フィ「純粋にね」

アル「そう純粋に」

フィ「純粋に考えることって意味があるの」

アル「あるでしょ。「僕個人として何を思っているか」っていうことなんだから」

フィ「でも、実際はいろんな要素があつまって、君が何かを考えているわけでしょ。それを純粋

に考  
え出したところで、なんていうんだろう、なんの実用性もないともうんだけど」  
アル「え？え？……………あ、やっぱりよくわからないや。」  
フィ「あっそう」  
アル「君は考えすぎなんじゃないかな」  
フィ「君ほどじゃないとおもうよ」  
アル「君はなんか決まったのやりたいこと」  
フィ「ああ。俺はまあ出版関係に進もうって思ってる」  
アル「え、でも。もの書きになるって言ってなかったっけ」  
フィ「ああまあ。前はな。でも。やっぱりもの書きになれるのは一握りだし、それに、おれ自身、そ  
んな30すぎまで、親のスネかじって。粘ってがんばろうとか、そういう気もないなって思っ  
てさ。」  
アル「僕は君はもっと才能があると思うよ」  
フィ「そういつてくれるのはありがたいけどさ。才能あるやつってのはもっと違うんだよ。  
全然。」  
アル「え？でも。いいの。それで、あとで後悔するんじゃないのかな。」  
フィ「まあ後悔はするかもしれないけど。これが俺が決めた最良の選択だから」  
アル「でも君の個性はどうなるんだよ。結局、君も社会にうずもれていくのか」  
フィ「うずもれていくっていうのはどうなんだろう。俺は、社会の歯車の一員として、役割をい  
ただ  
けるのは光栄なことだと思うけどね」  
アル「痛々しい。」  
フィ「全然、痛くもかゆくもないけどね」  
アル「負け犬だな」  
フィ「じゃあ君はどうなんだよ」  
アル「僕はまだわからないけど君みたいにはなりたくない」  
フィ「あっそうか」  
フィ「まあ君がいいと思うんだったら、それはそれでいいけど」  
フィ「そうだね。俺は俺の人生だから」  
アル「うん、そのとおりだ」  
フィ「まあ初任給でたらおごってあげるよ」  
アル「いいよ。」  
フィ「それまでにお前もどうにか答えが見つかるといいな」  
アル「そうだね、俺はもう少し考えてみるよ」  
《家》  
アル「ただいま」

セリ「おかえり、どこいったの？」

アル「公園。ハトにエサあげてた。」

セリ「そっか」

アル「あいつら、俺がいないとダメなんだよ」

セリ「ねえ」

アル「なに？」

セリ「なんか見つかった？」

アル「うん、そう。それをずっと考えてたの。」

セリ「で？なんかわかった」

アル「とりあえず、もう少し考える時間が必要だってことはわかった」

セリ「あ、そう。」

アル「うん。とりあえず、今は悩むことに集中して、どうにか早く答えをみつけないとね」

セリ「あっくん」

アル「なに？」

セリ「バイトしたら？」

アル「え、なんで。バイトしたら考える時間減っちゃうじゃん。そうじゃなくて今はとにかく悩むこ

とに集中して・・・」

セリ「・・・」

アル「・・・あ、もちろんせっちゃんのことには幸せにするよ」

セリ「・・・」

アル「・・・あの、あんまり見られると考えられないから」

セリ「ここ、家賃払ってるの私じゃん。」

アル「うん、ありがと」

セリ「食費も、光熱費も私がバイトしたお金で払ってるじゃん」

アル「うん、だから感謝してるよ」

セリ「そうじゃなくて、それに対してなんか思ってよ」

アル「感謝じゃなくて？うん、だから、申し訳ない気持ちはあるよ。それは」

セリ「でしょ？」

アル「でもさ。だからといってだよ。やりたくない仕事についたりそういうのは嫌なんだよ。」

セリ「私はやりたくないバイトもやってるよ」

アル「だから、なんでやってるのかなって思うよ？」

セリ「は？生きていくためでしょ」

アル「うん。それはそうなのかもしれないけど。それは行動に対する純粋性っていうのを失っている

ことにならないかな」

セリ「じゃあ、生きていってみなよ。一人でさ。無理でしょ。」

アル「無理じゃないよ」

セリ「無理だよ。」

アル「無理じゃないよ。」

セリ「じゃあ。出て行く」

アル「無理だよ。やめてよ」

セリ「ほら、無理なんじゃん」

アル「違うよ。僕にとって君は生きる希望で、だから、そういった意味でだよ」

セリ「あっくんがバイトしないなら出て行くから」

アル「どうしてそうやって僕を追い込むんだよ」

セリ「だっていま私幸せじゃないもん、幸せになりたいもん」

アル「え……、ほんとに？」

セリ「ほんとに。幸せじゃない」

アル「一緒にいるのに？」

セリ「幸せじゃない」

アル「え、あ。そうか。そうだったのか。おれはてっきり幸せなんだと思ってた」

セリ「うん、そう。いままで黙ってたけど、私、いま幸せじゃない」

アル「わかったよ。いいよ、もう言わなくて。もう、言ってよ。言わなきゃわからないじゃん。

そっ

か。え、いつから？幸せじゃなかったの？」

セリ「あっくんが、ずっと一人で考えはじめてから」

アル「そっかそうだったんだ。」

セリ「気づかなかったの？」

アル「気づかなかったよ。俺は変化に気づけなかった。だって、俺は、君といるだけで幸せだったか

らさ」

セリ「そっか。ごめん、そうなの。だから働いて」

アル「わかった。働く。」

セリ「ほんとに？」

アル「働くよ。あたりまえだろ、俺はせっちゃんを幸せにしたいもん」

アル「好きなことじゃなくても？」

アル「とりあえず、バイトにしとくけど」

セリ「そっか。うん、でも、あっくんにとって大きな進歩だと思う」

アル「で、どうやって、働けばいいの？」

セリ「まず、履歴書かってこようか」

アル「おっけー」

《コンビに》

アル「履歴書～履歴書～」

コンビニの前にヤンキーがいる

アル「・・・」

ヤ1「なに見てんだよ」

ヤ2「なんか文句あんのかよ」

ヤ3「あ？」

アル「入りづらいなあと思ってさ。」

ヤ1「あ、てめえやんのかこら」

アル「いや、ちがうくて。そのケンカしたいとかそういうんじゃない。入るのが嫌なひともいるん

じゃないかなっておもって。」

ヤ1「関係ねえだろ。だれがここにいちやいけないうって決めたんだよ」

ヤ2「法律に書いてあるのかよ」

ヤ3「書いてあんのかコラ」

アル「いや、法律にかいてることだけ守ってたらどうしようもないじゃない」

ヤ2「おい、なんだよ。こいつ」

ヤ3「気持ち悪いからどっかいけよ」

ヤ1「調子ぶっこいてんじゃねえぞ」

アル「いや、君達がどっかいけよ。そうだ、君達も働いたらどうだい。履歴書でも買ってさ。」

ヤ1「おい、お前やんのかコラ」

アル「しかたないな。怪我するのは君達だぞ」

ヤ2「上等だ、こら」

アル「三人まとめてかかって来・・・」

囲まれて蹴られる。

アル「やめろ、やめるんだ」

ボコボコにされる。

アル「痛くもかゆくもないぞ」

さらに、ボコボコにされる

アル「やめろ、やめて、ごめん。ごめんよ。ほんとに。ごめんよ」

ヤ1「二度とヤンキーなめんじゃねーぞ」

ヤンキー去る

アル「・・・おい。それでおわりか・・・俺はここにいるぞ。かかってこいよ。不戦勝だな」

ヤンキー帰ってきて、もう一発殴る

アル「いってててて・・・」

《家》

アル「いっててててて。いやはや。ひどい目にあつたよ。」

セリ「よしっと」

アル「あいつら、言葉では敵わないからって。力でひとをこけにしやがって。」

セリ「いたかったね」

アル「いたくないさ、こんなもの。」

セリ「履歴書は？」

アル「ほら、このとおり無事さ。」

セリ「えらいぞ、あっくん」

アル「あいつら、俺に謝れっていったけどね。俺は謝らなかったんだ、なんどなぐられたって。

謝ら

なかったんだ。だって俺は、悪いことしてないからね。そうだろ」

セリ「すごい。かっこいいよ。あっくん」

アル「だろ」

セリ「じゃあ。ちょっと一休みしあら。履歴書書こう」

アル「いや、僕に一休みなんか不要だぜ。いま書くよ。今ならかける気がするんだ」

《家》

セリ「かけた？」

アル「まだ」

セリ「いま、どこらへん。」

アル「いま、名前」

セリ「全然書いてないじゃん」

アル「静かにして。いま、魂込めてるから」

セリ「あ、ごめん」

アル「ふー。」

セリ「終わった？」

アル「いま、一文字目」

セリ「そっかー。」

アル「よし。」

セリ「・・・息とまってるよw」

アル「ああ！！！！おい！」

セリ「え？」

アル「しゃべりかけるなよ。」

セリ「ごめん」

アル「ああ。ゆらいだ。魂が揺らいで。書き損じた。ああ！やり直した」

セリ「ごめんね」

アル「もう一枚とって」

セリ「うん、はい。」

アル「もう、しゃべり掛けないでね」

セリ「うん。はい。」

アル「・・・ちょっと。見ないで・・・君はかわいすぎる」

セリ「あ、はい」

アル「よし。」

《家（夕方）》

アル「ふー。疲れた。」

セリ「おつかれさま」

アル「いやあ。みんなすごいなこれを普通に何枚も書いているんだよね

セリ「おつかれさま」

アル「ああでも。こういうのも悪くないね。この紙、一枚に俺の生き様と思いと独創性を全て注ぎ込

むわけだからね。これはもう。出産だよ。この紙は俺の分身だよ。だんだんかわいく見えてきたな」

セリ「コーヒー入れるね」

アル「うん。」

アル、履歴書をお腹のように抱く。そこへセリエーヌがコーヒーをもってくる

アル「おい！！」

セリ「なに」

アル「危険だ。僕の人生経験から言って。そのコーヒーは危険だ」

セリ「コーヒーをぶちまけて、履歴書に」

アル「かかる。そう、そのとおり。ふー。危ない危ない。気がついて」

セリ「あああああ」

アル「おい！なんでふざけたの。今。ねえ。こどもだよ。これは」

セリ「あ、ごめん」

アル「まったく。こわかったなあ」

セリ「あああああ」

アル「おい！ねえ。いま、言ったばかりでしょ。え、なんで。バカじゃないの」

セリ「あ、ごめん」

アル「もういいからね」

セリ「・・・」

アル「ほんとに」

セリ「はい」

アル「そこ、おいて。」

セリ「はい。」

アル「よしっと」

セリ「見てあげよっか」

アル「いいよ。」

セリ「見てあげるよ。」

アル「いいよ。恥ずかしいから。」

セリ「見せてほしいです、アルセスト様」

アル「しかたがないな、よかろう。心してみるのだよ」

セリ「ははあ。ありがたき幸せでござる」

アルセスト、履歴書をセリエーヌに渡す。

アル「どう？」

セリ「・・・ねえ。経歴のところにドラゴンの絵が描いてあるのはなんで？」

アル「あ、それ。降りていちゃたんだよね」

セリ「そっか、降りてきちゃったんだったら仕方ないね」

アル「でしょ」

セリ「あと、この。特技ところのQRコードはなに？」

アル「あ、ほら。俺の特技、形態模写じゃん。」

セリ「うん」

アル「で、やっぱ見せたほがいいよな。って思って。ユーチューブにリンクはってみた」

セリ「そっか。独創的～♪」

アル「でしょ。いや、それ思いついたときには、やっぱ俺って天才だなって思ったわ」

セリ「あと、趣味のところなんだけど。」

アル「あ、うん」

セリ「趣味とは一体なんだろうか。俺はそれについて疑問をもった。」

アル「いい書き出しでしょ」

セリ「ある個人の趣味が文化を生み出したのか。文化から派生する形で趣味が生み出されたのか。よ

り根源的で原始的な趣味こそが、文化の発祥であると考えれば、我々の芸術活動というのは、その派

生でしかない。本当に新しいものというのは、それらの原始的な趣味に新たなものを加えるとい

ったことを考えていかなければならないのではないか」

アル「深いでしょ。」

セリ「そうだね。」

アル「あ、あと。まあ志望動機のところは、あんまり気にしないで」

セリ「「セリエーヌを幸せにするために仕事をしなければいけなくなった。ちなみに、セリエーヌとは

将来的に結婚を考えています。」」

アル「まあ、そうね。うん、まあ。そういうこと。俺の気持ち。」

セリ「ねえ。アルセスト・・・」

アル「なに？」

セリ「普通にしよう。」



アル「うん、結婚しよう。え？いまなんて言ったの？」

セリ「普通にしよう」

アル「いや、これが俺の普通だよ。」

セリ「違うでしょ。普通じゃないようにしてるでしょ」

アル「え？は？は？何いってるの。これが俺のありのままなんだって」

セリ「だから。そういうの誰も求めてないから」

アル「どうかな」

セリ「どうかな？」

アル「もしも僕が採用担当だとしたら、何を書いているかじゃなくて、何を感じるかだと思う」

セリ「たぶん、ふざけてるって感じると思うよ」

アル「そしたら、その採用担当がそこまでだってことだよ。」

セリ「ねえアルセスト」

アル「なに」

セリ「普通にしよう」

アル「君まで僕をそういうふうにするのかい」

セリ「だから、アルセストが独創性にとんだ人ってことはわかるよ。でもね、それを発揮するために

は、社会に出ていかなければならないでしょ。だから、私がいいたいのは、そのためにね。今は、そ

の正体を隠してね。で、アルセストの独創性を発揮できる場所を手に入れてほしいって思うわけ」

アル「能ある鷹は爪を隠すみたいなの？」

セリ「そう、能ある鷹は爪を隠すみたいなの」

アル「こう爪を隠しておいて・・・カッ！みたいなの」

セリ「そう」

アル「・・・確かにそうかもしれないな」

セリ「でしょ」

アル「人は上に立たれるのを嫌うからね。ゆっくり育てていこうとか、扱いやすいなって思わせ

たほ

うが、雇ってもらえるかもしれないね」

セリ「そうだよ。アルセスト」

アル「でも、そういうだまし討ちみたいなのは人としてどうなのかな」

セリ「アルセストは人？」

アル「え？」

セリ「鷹でしょ？」

二人「カッ！」

鷹となって、空を飛ぶアルセスト

セリ「だから、これ私が書いた履歴書だから。これをもって明日面接いってきて」

アル「うん、わかった、いってくる」

セリ「いってらっしゃい」

《面接》

アル「トントン」

面接「どうぞ」

アル「失礼します」

面接「あ、座ってください」

アル「・・・はい。」

奇をてらった座り方をする

面接「あ、あまり緊張しなくても大丈夫ですよ」

アル「あ、はい。」

リラックスした座り方をする。

面接「あの、普通に座ってください」

アル「はっ!？」

セリ「普通に!普通にだよ!」

アル「失礼しました」

面接「はい、では。さっそく面接をおこなっていきたいと思います。」

アル「はい」

面接「アルセストさん、歳は29歳。えっと今までどんな仕事をなされてたんですか」

アル「えっと。その表現活動を少々」

面接「あー。路上ミュージシャンとかそんな感じの。」

アル「あ、いや。演劇・・・いや、はい。そんな感じですよ」

面接「はいはい。え、では。志望動機の方から言ってもらってよろしいでしょうか」

アル「えー。その御社の・・・御社は・・・御社に。御社。お客さまを第一に考えており、その企業

マインドというものにマイルドな共感をするとともに、え。その哲学的意図および笑いのセンス」

面接「はい。・・・えっと・・・もういいですか？」

アル「あ、はい。すみません」

面接「えっと、ちなみに週何ぐらいから入れますか？」

アル「週・・・1?・・・からでも大丈夫ですか？」

面接「えっと、募集要項には週3からって書いてあったと思うんですけど」

アル「あ、すみません。見落としていました。はい。あ、じゃあ週3で」

面接「週3ね。もう少し入れる？」

アル「いや、えっと。うーん。ああ・・・」

面接「週3ね。はい、わかりました。じゃ結果は今日中に電話でお知らせしますので」

アル「え、終わりですか」

面接「はあ」

《家》

セリ「ただいま」

アル「おかえり」

セリ「どうだった？」

アル「まあ大丈夫じゃない？」

セリ「そっか、よかった。」

アル「ああ！」

セリ「おつかれさま」

アル「俺は魂を売ったような気分だよ！ああ死にたい！死にたいよ！」

セリ「うまくできたんだね」

アル「これがうまくやるってことか。くそ。俺は最悪だ。俺はずっとこういうことをしていくのか。

ねえ俺、今日、何回「すみません」って言ったと思う？100回は言ったんじゃないかな。別に悪い

ことなんか何もしてないのに」

セリ「結果はいつくるの？」

アル「あ、今日中に電話で報告するって」

セリ「そっか。ドキドキだね」

アル「まあね。」

セリ「テレビでもつけよっか」

《テレビ》

白柳「はい！今週もやってまいりましたミュージックディスクカウントTVのお時間です。ワタクシ、

司会の白柳と」

黒柳「黒柳です。よろしくお願いします。」

白柳「それではいよいよ。第一位の発表です。第一位は、どうんどどどおどどどどん。オロント・

ジャクソンさんです。」

黒柳「まあカッコいい」

アル「オロント……」

セリ「え？知り合い」

アル「うん。後輩」

白柳「オロント・ジャクソンさん。サードシングルにて堂々の一位獲得。どうですか今の感想は？」

オロ「わたすが、ここまでこれたのは、地元みんなのお陰だと、思っています」

アル「あいつ、なんでなまってるんだよ」

白柳「オロント・ジャクソンさんは九州桜島出身ということで、桜島の大噴火大変でしたね」

オロ「ええ・・・まあ・・・うぐ」

白柳「でもご両親にご健在ということで・・・ご両親にはもう報告されたんですか？」

オロ「いえ、実は、両親には黙って活動をしてきました。」

白柳「え、そうなんですか？」

オロ「ちょっと今報告してもいいですか？」

黒柳「しちやいなさい」

オロ「もしもし、あ、母さん？あ、ちょっと。7ちゃんえる。つけてくれる？なんでって。いいから

いいから。誰映ってる？なに言ってんね、なんの容疑もかけられてないわ。今までだまっとって、あ

れなんやが。心配かけるのもあれじゃったから、成功したら、報告しようおもったんよ。

おれ、

一位とったんよ。こんど、博多スーパーアリーナで凱旋ライブすっからよ。まっとってな。」

白柳「いや。実にほほえましいですな」

黒柳「こんな息子がアタシもほしい」

白柳「それではそろそろ準備もできたおうですので、いってもらいましょう」

黒柳「オロント・ジャクソンで君の瞳はグリーンカレーです。聞いてください」

『君の瞳はグリーンカレー』

《家》

アルセスト、テレビを消す

セリ「え、なんで？」

アル「いや、耳が腐るからさ」

セリ「あ、そう。」

アル「は？なんであいつ。は？意味がわからない」

俺はいいとは思わないけどね」

セリ「わたしはいいと思うけどな」

アル「俺は全然いいと思わないけどね」

セリ「ふーん」

アル「ふっ。君も一般的だね」

セリ「そっかあ。」

アル「え、なに。俺がおかしいの。」

セリ「そんなこと言ってないでしょ」

アル「そういってるじゃないか」

セリ「言ってないよ、それは人それぞれだからそれはいいとは思うよ」

アル「そうだろ。そうだよ。別にどうだっていいじゃないか」

セリ「でも、人のものだからって否定することはないんじゃない？」

アル「そんな、そんな風には思っていないからね」

セリ「そうなのかな」

アル「いや、僕は彼のことをカッコイイと思ってるし、曲もいって思ってるよ。でも、詩がさ  
えな

い。あんなのは偽りの詩だよ。周りの目ばっか気にして魂がこもっていない、誰からもいいと思  
われ

ようとしている詩さ。そんなものに心を揺さぶれるような人間の気がしれないって言ってるん  
だよ」

セリ「そうかな」

アル「そうだよ。だから、おいしいんだよな。あいつは。おいしい、ほんとにおいしいよ。どからさ。  
いい

こと思いついた。俺があいつに詩を提供するってのどうかな、ゴーストライターみたいな感じ  
でさ、

で、後々に俺の存在が明らかになってくるっていう。ね。そういう感じで」

セリ「アルセストの詩はよくわからないよ」

アル「そうだ、フィラントに連絡をとってもらおう。あいつ今出版業界だから顔が広いんだよ。  
」

アル「思い立ったら吉日だ。いま電話してみよう。」

電話がかかってくる

アル「噂をすれば。フィラントだな。もしもし。・・・あ、はい。あ、そうですか。あ、はい  
。あ、そうですか。あ、わかりました。はい。はい。失礼します。」

セリ「・・・」

アル「・・・うん。バイト。落ちた。」

セリ「そっか、ざんねん」

アル「まあ俺のいるべきところじゃなかったってことだよな」

セリ「また受ければいいよ」

アル「あー。でも、なんか悲しいなくそ。あー、もうばかみたいだ。」

セリ「私、バイト増やすね」

アル「いいよ。そんなことしなくて。一緒にいられる時間減っちゃうでしょ」

セリ「だって。生活していかなきゃいけないでしょ」

アル「だから、俺が」

セリ「嫌なんですよ」

アル「嫌だけど」

セリ「だから、私がバイト増やすって」

アル「どちらにしろ一緒にいられる時間が減っちゃうじゃんよ」

セリ「ねえ。アルセスト。そんなこと言ってられないでしょ」

アル「一緒にいたい」

セリ「あ、もう。あああああああああああああああああああああああああああ……だから、もうちょ

っとアルセストもゆっくり考えて。これから自分がどうしたらいいかってことね。」

《再開》

フィ「おう。久しぶり」

アル「お、おう」

フィ「あいかわらずだな」

アル「素敵な服だね」

フィ「まあ金があるからね」

アル「似合ってるよ」

フィ「まあとりあえず、どっか入ろうぜ」

アル「あ、で。」

フィ「来るよ。あとから」

アル「あ、そう。」

《高級居酒屋》

フィ「え、お前。オロントのこと嫌いじゃなかったっけ？」

アル「あーまあね」

フィ「なに金でも借りる気？」

アル「ちがうよ。ちょっと提案したいことがあって」

フィ「あ、っそ。てか、感謝しろよ。あいつの予定押さえるの今めちゃくちゃ大変なんだからな」

アル「そうだよ。それは。ありがと」

フィ「なんか見つかった？」

アル「え？」

フィ「とりあえず、考えるって言ってたからさ」

アル「ああ……わからない」

フィ「そうか」

アル「そっちは？」

フィ「じゃーん」

アル「なに、結婚したの？」

フィ「まあね。」

アル「言えよ。」

フィ「ごめんごめん」

アル「なんだすっかり幸せじゃないか」

フィ「普通だよ。普通。」

アル「普通ね」

フィ「セリエーヌとは？つづいてるの？」

アル「あ、うん。一応」

フィ「うまく行ってないの？」

アル「俺がまあこんなだからね」

フィ「こんどお前にも仕事紹介してやるよ。」

アル「いいよ別に」

カランコロン

フィ「おーオロント。」

オロ「どうも」

フィ「おい、アルセスト」

オロ「あ、どうも、先輩。久しぶりです」

アル「やあ」

オロ「なんすか、なんすか。」

アル「今日は忙しいなかきてくれてありがとう」

オロ「いっすよ。先輩の頼みですもん」

アル「いや、ありがとう。でね。その、話ってのは」

オロ「まさか、自分の詩を使ってくれとかそういうことじゃないっすよね」

アル「・・・」

オロ「え、凶星っすか。ちょっと待ってくださいよ。え、ほんとに？」

アル「いや、ちょっと読むだけでいいから」

オロ「え？書いてきちゃったんですか？あーじゃあ。まあせっかくなんで」

アル「どう？」

オロ「・・・ふふううふ。ふふふ。いやすごいっすね。まったく意味がわからない」

アル「・・・」

オロ「いや、でも。先輩がどうしてもっていうんだったら。考えなくもないですよ」

アル「ほんとに？」

オロ「じゃあ。あの、いま、ケツを出してもらってもいいですか。ここで」

アル「ここで？」

オロ「はい。その思いの強さってのを確かめたいんです」

フィ「おい、オロント。」

オロ「どうですか、できますか」

アル「あたりまえだろ」

フィ「おい、アルセストも」

オロ「はい。じゃ、どうぞ」

アルセスト、ケツを出す

オロ「たははははは。・・・ほんとに出してる。・・・先輩。」

アル「・・・」

オロ「先輩は才能ないですよ」



アル「・・・」

オロ「フィラントさんもこんなくだらない用事でよびださないでくださいよ。あと、もうこの人と付

き合わないおうがいですよ。頭おかしいですよ、この人」

アル「おい。凡人。」

オロ「じゃ。僕はここらへんで」

アル「おい、俺と勝負しろ。」

オロ「もうかわいそうになるからやめてくださいよ」

アル「ひ弱な坊やが」

オロ「ボウヤって言わないでもらえますか？」

アル「いじめられっこのひ弱なボーやが」

オロ「ボウヤっていうのやめてもらえますか？」

アル「腕相撲」

オロ「いいですよ」

二人、腕相撲をする。

アル「おい、レディーファイって言え」

フィ「おれが？」

アル「お前以外いないだろ」

フィ「わかったよ、レディーファイ」

アル「痛ってえ」

オロ「だからいったじゃないですか。鍛えたんですよ。先輩に言われてね」

アル、泣く。

フィ「まあまあ。あんまり気にするなよ。」

アル「気にしてないよ。のろってるだけだよ。.:@]:!l@:pl@pl:l@pl@pl@pl@」

フィ「もう今日はパーっといこう、金はある」

アル「いいよ帰る」

フィ「付き合えよ。付き合ってくれよ。ちょっと行きたいところがあるんだが勇気がでないんだわ。

お前が一緒にいてくれると、非常にこころづいよいんだが」

アル「まあそこまで言われたら考えなくもないけど」

フィ「よし。じゃ決まり」

アル「どこいくの

フィ「キャバクラ」

《キャバクラ》

嬢1「いらっしゃーい」

嬢2「どうも〜」

フィ「あ、どうも〜」

アル「お前、はじめてじゃないだろ」

フィ「はじめてだよ、あ、どうも。とりあえず、角ハイください。お前は？」

アル「水で結構です」

フィ「角ハイで」

嬢「はい」

アル「おい！」

フィ「たまにはいいだろ。」

アル「僕はお酒というものをいまだかつて飲んだことがないんだ」

フィ「ならなおさらだな」

アル「ところで彼らは、男なのか、それとも女なのか」

フィ「でも、飲みすぎるなよ」

アル「なんで」

フィ「大事なのはアフターだから」

アル「なんだそのアフタヌーンティーっていうのは」

フィ「閉店後の店外デートのことだよ」

アル「デート？」

フィ「楽しい感じにすれば危うくばがありうるからね」

アル「帰る。僕にはセリエーヌがいるからね」

フィ「待てよ。」

アル「君だって奥さんがいるんだろ」

フィ「違うんだよ。これはあくまでメタフォリカルな活動なんだよ」

アル「メタフォリカル、哲学的な？」

フィ「そう。だからね。僕が思うに。その・・・奥さんとか、彼女とか。そういったものへのそ  
うい

う固執した考えっていうのが偏見を生むんじゃないかなと思ってさ。君だって、そういうものに  
囚わ

れているってるっていう感覚は少しはあるだろ。それは不自然なことじゃないのか。不自然なこ  
とは

正しいことなのか」

アル「しかし。人間というのはそもそも不自然な生き物なわけで」

フィ「ようは、かわいい女の子と話したいか話したくないかってことだよ。正直な気持ちとして  
」

アル「まあ話したくなくはないけど」

フィ「だろ。だったら自分の気持ちに正直になるべきだろ。お前の哲学として」

アル「ああ。そうなのかな。俺の哲学そうなのか」

嬢1「おまたせー」

アル「でも、かわいくないよね」

フィ「飲めばかわいく見えるから」

アル「ほんとかな」

嬢2「何、この子かわいい」

フィ「今日、はじめてなの」

嬢1「じゃあ。かんぱーい」

アル、突如、立つ

アル「形態模写。勃起したチンコ」

嬢1「やだあ」

嬢2「いやあ」

フィ「いいじゃないか、アルセスト」

アル「だまれ、陰毛」

フィ「ふたり合わせて男性器ってコラー」

アル「は、え、今の面白い？ウサギの尻尾はおもしろいってねー」

嬢1「うけるー」

嬢2「え～芸人さんですか？」

アル「まあ昔、ちょっと役者だったっていうか」

嬢1「え、俳優さんなんですか？」

嬢2「すごーい」

アル「そんなことない、そんなことない」

嬢1「え、じゃあ、モノマネとかもできるんですか？」

アル「え、モノマネ。」

嬢2「ちょっと芸人じゃなくて俳優さんなんだから」

アル「できるよ。役者にできないことはないから」

フィ「おい、やめとけてっ・・・」

アル「・・・」

嬢1「似てる」

嬢2「そっくり～」

アル「まあこれは僕の実力の半分以下だけどね。いや、でも君達はさすがにいろんなお客さんを相手

してるだけあって、目が肥えてるね。すばらしいよ。僕の才能に気づくとは。君達みたいな人間が、

もっと増えれば、世界はもっと素晴らしいと思うんだけどね。残念ながら、この世の中は腐ってる。

大衆迎合の表現者と、個人的価値観を放棄した観客との間で、執り行われるくだらないお芝居だよ。

飲み会のお通しみみたいなもんさ、セックスの前の前戯みたいなものさ。誰も本気でなんかいやしない。

ああ、そんなものどこが面白いんだ。僕は頭がおかしいさ。君達はすばらしいよ。君達は本当に。」

フィ「あ、ごめんね。なんか酔っ払っちゃったみたいで」

アル「なに言ってるんだ。僕は爽快さ。いたってクリアさ。むしろ、いつにもましてクリアさ。コ

これはクリアサヒさ。あーこの感覚だよ。僕が君達に伝えたいのはさ。俺は今、万能感だよ。」

フィ「ちょっとお水もらっていい」

嬢1「あ、うん。」

アル「チェンジ」

嬢2「え？」

アル「君の顔は酔ってみても、誰が見てもブサイクだ」

フィ「おい！アルセスト。いくらブサイクでも言いすぎだぞ」

嬢2「もう、酔いすぎだぞ」

アル「気持ち悪いからどっかいけ」

フィ「ごめん、別の子いいかな」

嬢1「すいませーん」

セリ「はーい」

フィ「お、おおおお。めちゃくちゃかわいいのきたぞ。おい。アルセスト」

アル「・・・あたりまえだろ。僕の彼女なんだから」

《アフター》

セリ「こういうお店くるんだね」

アル「フィラントに無理やりつれてこられたんだよ」

セリ「ふーん」

アル「疑っているの？」

セリ「うん」

アル「疑うのは君の勝手だからね。好きなだけ疑えばいいさ」

セリ「お酒飲んでるでしょ」

アル「飲んでるよ。だからってぼくの頭はすんぶんの狂いもないむしろクリアさ」

セリ「お酒飲むんだね」

アル「飲むよ。それは僕だって」

セリ「はじめてみた」

アル「ずいぶんと、綺麗な格好だね」

セリ「ありがと」

アル「君のスカート姿なんてはじめてみたよ」

セリ「そうだっけ？」

アル「かわいい」

セリ「それはどうも」

アル「それで、あれか。いろんな男を誘ってるのか」

セリ「え？」

アル「ああ。そうか。その。太ももとかを触らせたりしてるのか。」

セリ「そんなこと、してないから」

アル「え、でも、少しだけだったら、触れることもあるんじゃないか。」

セリ「・・・まあでも。たまに触ってくるお客さんもいるねえ」

アル「ほら、みろ！やっぱりそうじゃないか。そうやって、君は。なんでそういうことをするんだよ」

セリ「なんでって」

アル「なんでこんな不潔なお店で働いてるのって聞いているの」

セリ「給料がいいからだよ」

アル「やめて」

セリ「無理」

アル「なんでだよ」

セリ「なんでだよ、じゃないでしょ。」

アル「なんだよ」

セリ「あっくんが働かないからだよ」

アル「・・・だからって。他に仕事はいくらでもあるでしょ」

セリ「・・・仕事はいくらでもあるんだから、あっくんだって働けば」

アル「だから、働くよ。だから、やめてよ」

セリ「あっくんは働けないよ。」

アル「一回、バイト落ちただけだろ。」

セリ「あっくんは働けないよ。あっくん、ダメ人間だもん」

アル「いま、なんていったの」

セリ「あっくんは、ダメ人間だっていったの」

アル「ねえ、え、、なに。せっちゃんは俺のことダメ人間だと思ってるの」

セリ「だって。ダメ人間でしょ。何にもしてないんだもん」

アル「何もしてないからね。考えてるんだから。」

セリ「それを何もしてないっていうの」

アル「違うだろ、考えてるんだから。何かしてるだろ。」

セリ「私ねー。いまプロポーズされている人がいるの」

アル「ウソでしょ」

セリ「ウソじゃないよ。」

アル「ウソだよ」

セリ「会社を経営している人で、私のことをすごくかわいって言ってくれるの」

アル「結局、金だろ」

セリ「話も面白くて、いろんなところにつれてってくれるの」

アル「つれてってくれたのか」

セリ「つれてってくれたの。」

アル「君はそういう男がいいのか」

セリ「私はそういう男がいいの」

アル「ほんとうに？」

セリ「ほんとうに。だって私、普通の女の子だもん」

アル「君は普通なんかじゃない。」

セリ「普通だよ」

アル「普通なんかじゃにない」

セリ「普通なんだって」

アル「普通じゃないよ。君は特別なんだって。君はぼくと一緒だろ。どうしてだよ。どうしてそう  
うな

っちゃったんだよ。」

セリ「幻想。それ、全部あっくんの幻想だから」

アル「幻想なんかじゃないよ」

セリ「幻想だってば」

アル「まさか処女を失ったのか」

セリ「処女のなんかとっくに失ってるから」

アルセスト、泣く

アル「・・・大好きだよ・・・大好きだよ・・・大好きだよ・・・」

セリ「あっくんが私のこと大好きなのは知ってるよ。」

アル「じゃあなんでだよ」

セリ「でも、私は私を幸せにしてくれるひとと一緒にいたい」

アル「あーもうどうでもいいよ。僕のことなんてもうどうでもいい。僕はなによりも君と一緒に  
いた

いんだよ。君とずっと一緒にいたいんだよ。君だけでいいんだよ」

セリ「じゃあ私のことを買ってよ。」

アル「買ってやるよ。君との食事の時間も、君と一緒に歩く時間も、君と一緒に笑う時間も、君  
の体

も、君の愛も、全部全部全部、買ってやる。君はずっとぼくと一緒にいるんだ、君はずっと僕だ  
けと

セックスをするんだ。君はずっと僕だけを愛するんだ。僕は君を絶対に幸せにする、全力をかけ  
て幸

せにする。僕が君とデートする、僕が君とおしゃべりをする、僕が君と映画に行く、僕が君と旅  
行に

いく、僕が君を幸せにするから。・・・だから」

アル「まとまったお金ができるまで。さようなら。ごめんなさい。こんぐらしないちダメなのは

自分  
がよくわかっておりますので。はい。そのときまで！待っていてほしい気持ちは山々だけど、それも、  
やはり、君が決めることだから。でも。できたら、待っててほしいけど。だから、すぐさま。君を向  
かえにくるから。そのときには僕、君を幸せにできる人間になってるから。だからそのときは結婚し  
よう。」

セリ「これはなに、お別れなの、プロポーズなの」

アル「しばしのお別れだよ。」

セリ「そっか」

アル「だけれども、僕にとっての君とのしばしの別れは永遠とも等しいよ」

セリ「さよなら、あっくん」

アル「・・・」

セリ「さようなら、あっくん」

アル「・・・止めるなよ」

セリ「さようなら、あっくん」

アル「・・・ふりじゃないからな」

セリ「バイバイ、あっくん」

アル「ほんとうにいっちゃうんだからな」

セリ「じゃあね、あっくん」

アル「・・・さらばだ」

セリ「ふっ。あー。おわった〜」

嬢1「おつかれ〜」

セリ「ほんとめんどくさい、ほんとしつこい、キチガイでしょ、あれ」

嬢2「いや、よかったよ。目がさめてくれて」

セリ「あー、もうなんだろう。人生の無駄使い。くそ〜」

嬢1「もう気晴らしにさ、どっかいこうよ。」

嬢2「え？どこいく？え？ディズニーとか？サマーランドとか？」

セリ「あ、いい！いい！サマーランドいい！」

嬢1「じゃあ、決まり〜」

嬢2「ていうかこれ、この間、グアムにっていたおみやげ〜」

セリ「え？グアムだれと？」

嬢2「うふふふふふ」

嬢1「え？食べていい？」

セリ「え？え？え？おいしい〜」

アルセストが現れる。

アル「おい。」

セリ「どうしたの、あっくん。わすれもの？」

アル「だれが、キチガイだって、・・・？」

セリ「え？なんのこと？」

アル「だれがキチガイだっていってるんだよ～」

アル「まったく。どいつもこいつもクソやろうだな」

アルセスト、去る。

アルセスト、公園に立ち寄る

アル「やあ。ハト。いままでありがとうな」

アル「おれか？俺はいまから、ちょっと遠いところに行くんだ」

アル「大丈夫だよ。どうにかやっていくよ」

アル「お前らこそ、大丈夫かよ。俺がいなくて」

アル「あれだったら、一緒にくるか？」

おじさんがハトにエサをあげる

アル「・・・」

アルセスト、コンビニに立ち寄る。

ヤ1、ヤ2、ヤ3がリーゼントでバイトしている。

ヤ1「いらっしやいませ」

ヤ2「いらっしやいませ」

ヤ3「いらっしやいませ」

ヤ1「あ、あの」

アル「ん？」

ヤ1「その節はありがとうございました」

ヤ2「僕ら、あのあと、三人で話し合っって」

ヤ3「働いてみようってことになったんです」

ヤ1「働くって気持ちいいですね」

ヤ2「僕ら、今まで、その行き場のないエネルギーを」

ヤ3「どうやって発散していいかわからなくて」

ヤ1「しかたがなくヤンチャしてたんですよ」

ヤ2「なんかかっこ悪いですけど」

ヤ3「これが今の僕達の生きがいです」

ヤ「ありがとうございましたー」

アル「いま、僕は荒野にいます」

アル「ひとりになって考えてみて。」

アル「結局、僕は」

アル「大した人間ではないのだな」

アル「という結論にいたりました」



アル「ははははは。ありきりの結論だね」

アル「まあでも。そうなんだから仕方ない。」

アル「だから。僕も。」

アル「それなりに生きていくしかないってことです」

アル「僕はひとりで生きていくよりも」

アル「やっぱり誰かと話したいし」

アル「笑っていたい」

アル「それが、正直なところですよ」

アル「いまから、町に帰ります」

アル「どうか僕をみんなの仲間に入れてください」

アル「最初は、うまく馴染めるかわかりませんが」

アル「どうにか、みんなの真似をしながら」

アル「いろんなことを学んでいきたいと思います」

アル「やりたいくないこともやります」

アル「でも、その中で小さな幸せを見つけていきたいです」

アル「っていう、よくある感じの結論であります」

アル「あー。いかん、いかん。」

アル「こういうシニカルな考え方も早いとこ払拭しないとな」

アル「あー、えっと。最後に」

アル「僕が床磨きのアルバイトをしながら発見したことをひとつ」

アル「モップをかけるときに、こう、バックしながらかけると、自分の足跡が残らない」

アル「っていうね」

アル「まあ天才だよな」

ポイズン♪

アル「じゃあ。どこいく？」

セリ「あっくんは？」

アル「そうだな。うーん。えーと。ああ。」

セリ「ああ・・・じゃあ。喫茶店入ろうか」

アル「あ、そうだね」

セリ「決まった？」

アル「ん？あ、うん」

セリ「(店員に) すいません」

セリ「えっと。水出しアイスコーヒーと・・・」

アル「オレンジジュースで、はい、」

セリ「・・・」

アル「なに？」

セリ「ううん」

アル「え、なに？」

セリ「んー。」

アル「なに、なに？」

セリ「ううん」

アル「・・・そう。」

セリ「え？楽しくない？」

セリ「え、楽しいよ。」

アル「え、どこからへんが？」

セリ「どこらへん？」

アル「この、デートのどこらへんが楽しい？」

セリ「そうね。」

アル「うん」

セリ「内緒」

アル「なんだよ、それ。え？なに。」

セリ「アルセストは楽しい？」

アル「僕は、そうだね。嬉しい、、、というより何より緊張をしている、君が本当に楽しんでいるか、

そのことばかりが気になってしかたがない、だ、だけど、すごく幸せな気持ちは常に、この、ここ

の心臓のところを、打っている感じがあります」

セリ「なるほど」

アル「うん」

セリ「そうなんだね」

アル「そうなの」

セリ「私は嬉しいよ」

アル「そうなのね、そっか。なら、すごく、僕も嬉しいです」

セリ「そっか」

アル「そうです、ね、はい。また、デートしたい」

セリ「いいですよ」

アル「ほんとに？」

セリ「うん、また、誘ってください」

アル「うん、誘う。」

セリ「・・・コーヒー遅いね」

アル「そうだね、あ、ちょっと言ってくるよ」

セリ「え、いいよ、いいよ。すぐくるよ」

アル「そう？そっか」

セリ「ね、あ、芝居何時からだっけ？」

アル「19時から。開場は開園の30分前」

セリ「そっか。まだちょっとあるね」

アル「そうだね」

セリ「あっくんはいつから芝居はじめたの？」

アル「僕は大学からはじめた」

セリ「なんで芝居やりたかって思ったの？」

アル「そうだね、つまらなかったからかな、いろんなことが。だから、自分をもっと面白いものを作

りたかったっていうあ、そういう感じかな」

セリ「へえ。そうなんだ」

アル「あとは、なんだろうか。その、自分のキャラクターっていうのが、よくわからなくて、いや、

よくわからないっていうのかな、定まらないというか、なんちうか、からっぽというか、だから、ま

あ演じているときは、なんか安心するのかな。いや、よくわからないな」

セリ「脚本とかも書いたりするの？」

アル「たまに」

セリ「へえ。読んでみたいな」

アル「え、そう？」

セリ「うん。アルセストっていう人がどんなものを書くのかがすごく気になる」

アル「それは、うれしいね。うん、じゃあ。こんど書いたら見せるよ」

セリ「うん、楽しみにしてます」

アル「せっちゃんは、いつから、芝居はじめたの？」

セリ「私は高校から」

アル「へー、高校からなんだ」

セリ「

幕